

---

# 短編箱。

華恋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

短編箱。

### 【コード】

N1270BA

### 【作者名】

華恋

### 【あらすじ】

BLの短編たちです。 いろんなシリーズものあります。 まだ投稿してませんが作り置きしてあるので、少しずつ載せていく予定です。

## 巫抖と麗（前書き）

・巫抖と麗

ほのぼの…かな？

### 【人物紹介】

・巫抖みこと

高校生

麗とは幼馴染み

帰宅部

若干長めの黒髪

・麗あきこ

高校生

巫抖とは幼馴染みで同じクラス

バスケット部

巫抖より背が高い

## 巫抖と麗

日も長くなった今日この頃。

三階の教室から見えるグラウンドには野球部やらサッカー部やらで大部分が埋め尽くされている。

そんな彼らを何となく窓から眺めているとやっぱり何かしら部活に入っておけばよかったかな、なんて思う。

少し長めの髪を優しく掻き上げるように窓から風が吹き抜ける。

誰もいない教室。

勉強するにはもってこいの空間だ。

「さて、と。」

グラウンドから目線を外して手元に拡げてある英語の課題に取り組む。

やり始めて十分足らず。

廊下からこちらへ近づいてくる足音がした。

「あーっちい！あ、巫抖！」

名前を呼ばれて顔を上げる。

この声は……

「麗……？」

前の入り口から団扇で扇ぎながら教室に入って来たのはクラスメイ  
トの麗だった。

・・・実は俺の想い人だったりする。

「なあ、あつつい」

「知らねーよ。水飲んでこい」

「もー飲んだあ。男子もスカートなら涼しいのにな」

「野郎の生足なんざ見たかねーよ」

俺の言葉に麗はブツと吹き出して「確かに」と笑ったから、つられて俺も笑った。

麗とのやり取りは心地がいい。

「ってか部活は？」

「適当に理由つけて切り上げた。こんなに暑かったらバスケットに集中できねーよ」

「お前なあ…ちゃんとやっこいよな」

呆れながら言うと、「いーの、いーの」とへらへら笑ってる。

確かに今までバスケットしてました、と言わんばかりの額から流れる汗。ワイシャツは第二ボタンまで外されていて、つう…と首筋から鎖骨へと伝う汗がなんとも色っぽい。

だらだらと歩きながら麗は自分の席に着いた。

麗の席は俺の後ろだ。

振り返ると「あゝ」とか呻きながら、ぐでーと机に伏していて色素の薄い髪が風に靡いていた。

「・・・」

その柔らかそうな髪に触れようと手を伸ばして

「なあ、」

すぐに引っ込めた。

麗が急に顔を上げたからだ。

「何？」

平然を装いつつ言うが、心臓がドキドキと煩く鼓動しているのを感じる。

さっきの手は見られていなかっただろうか？

それにしても、机に頭を付けていたせいで麗の額が少し赤くなっている。

・・・可愛い。

なーんて思ったり。

そんなこと思っていると、

「俺寝るから起こしてな」

と、麗の突然の命令に「は？」となる俺だがそんなことアイツは気にしない。

「6時ね、おやすみ」

そう言つて俺が承諾もしないうちにそのまま窓を向いて目を綴じてしまった。

全く、我儘だな。

風に乗つて香る制汗剤特有の匂いを嗅ぎながら、勉強しよう、とまた机に向かった。

後ろからは愛しい人の規則正しい寝息が聞こえてきて運動部の暑苦しい声なんかよりよっぽど勉強がはかどる気がした。

麗を起こすまであと30分。

.....

キーン コーン カーン コーン・・・

学校中にチャイムが響き渡る。

「もう6時か。」

外を見ると太陽が先程よりも傾いていて、オレンジの色が強くなっ  
た気がした。

窓を閉め、帰り支度を始める。

学校には7時まで居ても良いことになっているが俺はいつも6時に  
学校を出ることになっている。

だって、腹減るもん。

あ。そういえば麗を起こさなきゃな・・・

クルツと後ろを向くと心地良さそうにまだ寝ていた。

「おい、麗。6時だぞ」

「.....」

反応なし、か。

「あーきーらー」

ほっぺを引っ張ってみる。

ぷ、変な顔。

「はひむにゃむ.....」

何言ってるのかさっぱり分からない。

ってか起きる気配ないんだけど。

汗で額に貼り付いた前髪を優しく払ってやると、隠れていた麗の寝顔がはっきりと見えて心臓が高鳴る。

男子にしては長い睫毛は目元を綺麗に縁取り、汗ばみながら頬を紅く染めている姿を見て理性が効かなくなりそうだ。

「・・・ヤバイなあ。」

とか言っても視線は麗から離せない。

親指で麗の下唇をなぞってみると「んう…」とか反応してくる。

あーもー！／／

そのまま麗の顎に手を添えて麗の唇に・・・

って、あああああつぶねー！！！！

あと少しのところだなんとか理性を働かせて近づいた顔を瞬時に離れた。

「~~~~／／…くそっ、好きすぎる!!!」

頭を抱えて小さく叫ぶ今の俺の顔はきつと真っ赤だと思っ。

それは暑さから来るものではないのは確かだ。

「…帰ろう。」

鞆にノートとかをバサバサと詰め込んだ。

6時30分にもなれば部活が終わった生徒が教室に集まってくる。きつと麗も起きるだろう。ってか、こんなに起こしたのに起きない麗が悪い!

帰る支度を済ませ、愛しい人を一瞥して教室を出た。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

あいつが教室を去ってから起き上がった。

ホントは途中から起きていた。

途中っていうのは確か唇を触られた時からだったかな？

その時はビックリしたけど、でも、巫抖だとわかったらすすりぐへドキドキして…。

巫抖の息を近くに感じて…。

期待してた。

なのに、あいつは何もしないまま離れていくし。

「……………」

巫抖に触れられた感覚がまだ残っている唇に手を当てる。

「意気地無し…。」

あと少しだったのになあ…。

残念…。。

しかも、『好きすぎる』『って、俺の事だと受け取っていいんだよな？

それって…

それって…

両想い…？

あぁどうしょ。

こんなに近くにいたのに今頃気づくとか俺ダセエじゃん…。

ずっと片想いだと思って遠慮してたけど、もう…。

机に掛けていた鞆を無造作に掴んで教室から飛び出した。

巫抖はまだ学校からは出てないはず。

追い付いたら打ち明けよう

『巫抖が好き』って。

そしたらお前はどんな顔するのかな。

笑って『俺も』って言うてくれる？

階段を駆け降りながら顔を綻ばせて、今度こそと期待を胸に数メートル先にいるあいつの名前を呼んだ。

【終わり】

## 巫抖と麗（後書き）

【巫抖と麗】如何でしたでしょうか？

一応シリーズものなのでまた別な話があります。

もしよかったらまた読んでやって下さいね。

ではまた（\*´、´）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1270ba/>

---

短編箱。

2012年1月3日02時59分発行